

第 1 回検討会における議論の要旨

[背景]

- ・ 一部地域に田園回帰の兆しが見えつつあるが、いまだ地方圏から東京圏への人口の流出が続いている。
- ・ 人口減少、高齢化等の著しい地方においては、地域力の維持、強化を図るため、地域外の人材を誘致すべく、移住・交流施策に積極的に取り組んでいる。
- ・ 人の動き、物流も多様化し、テレワーク等の新しい働き方が普及しつつある。
- ・ 変化を生み出せるような人材（ソーシャルイノベーター）が地域に入り始めている。
- ・ 人々のライフスタイルが多様化し、地域とのかかわりも多様化する中で、居住地以外の地域に関心をもち、「ふるさと」に貢献しようとする様々な動きが出てきている。

[移住・交流・「ふるさと」との関わりの必要性]

- ・ 田舎の価値や「ふるさと」への想いについて
 - 田舎で暮らすことの価値をどう肯定的に捉えていくかが重要。
 - コストと手間をかけて地元の人がこれまで守ってきた田舎の良さをきちんと評価することが必要。
 - 「ふるさと」への想いというものを広域的にあるいは政策的にどう捉えるのかを議論すべき。
- ・ 地域における知の再生産、人口の質の再生産の観点からも、広義の人口の流動性を増加させることが必要。
- ・ 過疎化や高齢化が進行している地域の元気を取り戻すため、都市からの担い手を地域づくりにどう活用していくのかという課題がある。
- ・ 都市から農山村への一方的な人、情報の流れではなく、相互の流れをつくることが重要。

[段階的な移住・交流・「ふるさと」との関わり]

- ・ 時間的にも地理的にも段階的に移住できる仕組みが有効。
- ・ 最近のライフスタイルからも、定住というより循環するような取組みも考えられる。
- ・ 人々と地域とのかかわりの階段、多様な入り口をつくることが重要。その階段の一段一段を低くしていく施策が求められる。
- ・ 取組みに時間を要することを念頭に、地域の時間軸に合わせた施策の展開が必要。
- ・ 多様な入り口として、中学生、高校生といった子供のときから地域とどう触れ合うかが重要であり、また、例えばクォーター制が導入される大学で大学生と地域の現場をつなげていく基盤づくりをすることも考えられる。

[地域づくりの担い手]

- ・ 地域づくりの担い手は自治体の中に住んでいる人だけではない。
- ・ 県人会など、都市圏に住んでいる人との多様な関わり、多様なネットワークをつくることも必要。
- ・ 首都圏のビジネスパーソンを含め、地域の中で新しい仕事をつくっていく人材をどう巻き込み、その活躍の基盤をつくっていくのか。
- ・ 住民ではないが、自分たちの関係のあるふるさとに関心を持っている人々に「ふるさと」をどうしていったらいいか知恵をもらう、まちづくりに参画してもらうための日野町のふるさと住民票の取組み。「ふるさと」への寄附や将来的に UI ターンに結びつけることが期待されている。
- ・ 地域外から入ってくる人が必ずしも良い人ばかりではないことを考えると、ふるさと住民票のように関所の役割を果たす仕組みを通じて、地域のメンバーとして入ってもらうことで地域づくりに役立ってもらうことも考えられる。

[移住を受け入れる環境づくり]

- ・ 地域の中の体制づくりが重要。
 - ビジネスパーソンが地域に経験やスキルを提供していく取

組み（プロボノ）などを進めるためには、自立した中間支援組織（コーディネート機能・プロデュース機能）の存在が重要。地域の中で能動的で、有機的なエコシステムをつくっていくことに留意することが必要。

- 地域の中で温度差がある中、価値観が異なる地域と移住者の両方が歩み寄りながら地域づくりを行うことが必要。
- ・ 移住定住の環境を整えていくことも必要。
 - ポジティブに地方に行く若者が活躍できる雇用環境のほか、空き家等の住環境、教育環境や交通の利便性等の条件も重要。